

- 1 派遣期日 平成29年6月16日(金)
- 2 研修先 学校名(会場名) 筑波大学附属小学校
所在地 〒112-0012 東京都文教区大塚 3-29-1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

3 研修内容

研究主題	「きめる」学び ～〈第2年次〉「きめる」を意識した授業とそこで育つ力～
-------------	-------------------------------------

(1) 公開授業(3学年 国語「物語文を読む」 桂 聖 先生)

本授業は、物語文「もうすぐ雨に」(光村図書3年上)に登場する中心人物の心情の変化を読み取る学習であった。桂先生は、授業におけるユニバーサルデザインの実践を行っており、本授業においても様々な工夫がみられた。

① 焦点化

授業の中でたびたび、「プラス」と「マイナス」という言葉が出てくるが、物語の中で、プラスの出来事や心情を「プラス」、マイナスの出来事や心情を「マイナス」としていた。本授業では、最初はマイナスだったことが物語を通してプラスに変わっていく所を読み取ることに焦点を絞っていた。考える視点が明確であり、どの児童「プラス」と「マイナス」に注目して読み取ることができていた。国語の授業において、多様な考えを児童から引き出そうとするあまり、意見が拡散し、収束せずに終わってしまうことがある。しかし本授業では、課題を焦点化し、落としどころがつけられた展開であった。そのことによって、多様な考えを引き出しながらも、子どもたちの考えがゴールに向かって収束されていった。

② 視覚化

板書においては、挿絵とセンテンスが印刷され、黒板に掲示されていた。センテンスも厳選されていたため、見やすい板書構成となっていた。導入は、各段落の挿絵とセンテンスの並び替えから始まった。段落同士のつながりを考えたり、文章と挿絵のつながりを視覚的に捉えたりして並び替えたことで、言葉に着目する力や文脈を捉える力も養われていた。また、児童から出た考えも必要のところだけを板書することで、すっきりとした板書構造となり、要点を絞ることができる見やすいものとなっていた。

③ 共有化

教師と児童とのやりとりだけでなく、児童間の意見交流の場が多く設定されていた。友達との意見交流を通して、解釈の多様性に気付く。そのときに子どもたちは、自分の考えを改めて見つめ、考えを見直したり、自信をもったりする機会となるのである。ペアやフリーで歩かせるなど様々な形態での交流を行い、飽きさせず、積極的な活動の状況を作り上げていた。『国語教育のユニバーサルデザイン』(東洋館出版社 2011年 桂聖)によると、表現せざるを得ない状況に追い込むことで、緊張感をもって主体的に活動を行うことができるとしている。「挙手一指名」方式では、手を挙げた子だけが表現をすることになり、発言をしない子にとっては、休憩の時間となってしまう。そこで、「全員起立。ペアで一つの答えを決めて、それをノートに書いたら座りなさい」などと指示をする。座った児童は答えが決まった児童であり、座った児童を指名すればよいということになる。「作業―確認―指名」方式にすることで、緊張感をもたせるとともに、友達との確認を通して、発表に自信をもたせるのである。このように、すべての児童に発表の機会を与えることにより、考えを伝えたいけれど、自信がもてず手を挙げることができなかった児童にとっても良い手立てになる。

(2) 授業の協議から

常日頃の国語の授業においてどのような指導を行っているのか質疑応答も交えながら話をしていった。

① 音読の重要性

新しい読み物資料を扱っていく上で、その資料をどれだけ読み込んでいるかがとても

大切になってくるという。授業の中で、「教師やほかの児童が取り上げた場面や言葉が資料の中のどのあたりのことを言っているのかを分かっていること」で、より理解が深まっていくという。そのため、単元に入る前から事前に何度か資料を読ませたり、通読した回数を記録させ、意欲付けを図ったりしている。

② 「きめる」ことの重要性

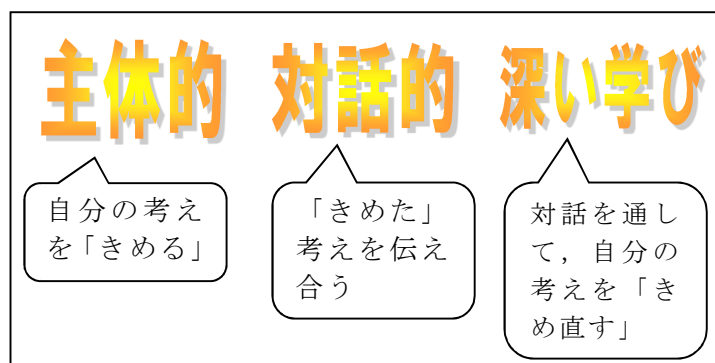
国語授業では、子どもが受け身となりやすい。教師が発問し、子どもが応答することに終始する場面が多い。全員の子が応答していればまだいいが、応答している子が数人で他の子は無関心ということもある。子どもが授業の受け身になる一番の原因は、子どもが授業で選択したり決定したりしていないからである。子どもが自分の考えを「きめる」ことで、友達の考えを聞きたくなり、授業に主体的に参加していくことにつながっていく。

(3) 子供の主体性と「きめる」学び

筑波大学附属小学校では、『「きめる」学び』をテーマとして、学校を挙げて追究している。各教科において、「きめる」を意識した授業を行っているが、どの教科にも共通している点があった。また現在ホットワードにもなっている「アクティブラーニング」との関連性についても触れていた。

① 主体的

「きめる」ということは子どものなかで行われる主体的な選択・決定に他ならず、「きめる・きめたくなる」ような発問や場면을教師が仕掛けていくことで、主体的な学びが形成されてくる。一人一人が自分の考えを「きめる」ことが大切である。



② 対話的

グループやペアにしても考えの交流がなかなか行われない場面が多くある。それは、子どもが受け身であるからにほかならない。①であるように一人一人が考えを「きめる」ことで、友達と考えを比較したり、検討したりすることにつながっていく。

③ 深い学び

対話を通して、自分の考えとの違いに気づき、考えを揺さぶられることとなる。そして自分の考えを「きめ直す」ことが深い学びであると考えている。また、自分の考えに改めて自信をもつことも深い学びであるとしている。

4 感想

アクティブラーニングという言葉が浸透していく中、今まではグループ学習や体験学習といった学習の手段や形態ばかりを考えてしまっていた。今回の公開授業の中では、ペアで話し合う学習することこそあるが、グループで活動する時間はなく、主に子どもたちが自分の頭で考え、全体の中で意見を出し合い、お互いの考えを共有し、より考えを深めていた。そこには、確実にアクティブに学習する子どもたちの姿があり、今までの考えを大きく覆される瞬間であった。子どもたちがアクティブに活動していくためには、課題を焦点化し、学習の視点を明確にもたせることが大事であり、選択したり決定したりする場面をつくっていくことで、子どもたちが主体的に学習に参加していく。視覚化や共有化をしていくことで自分の考えを深めていくことにつながっていく。今回の桂先生のユニバーサルデザインは、どの子にとっても「わかる」という考えがベースにある。わかるようになってくると、もっと知りたくなるのは、子どもも大人も一緒であり、わかる授業は、アクティブラーニングにつながってくるのだと思った。

今回の研究に限らず、公開授業等で様々な授業を参観させてもらうたびに、こんなやり方があるのか、自分だったらどうするだろうなどと考える機会を与えてもらえる。自分の成長・そして子どもたちのためにも、分かる授業を展開していくための研究・修養にこれからも励んでいく。